

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2191300058		
法人名	医療法人社団 大治会		
事業所名	グループホーム おおぞら		
所在地	岐阜県加茂郡八百津町錦織1530番地39		
自己評価作成日	令和5年6月18日	評価結果市町村受理日	令和5年9月8日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kajikokensaku.mhlw.go.jp/21/index.php?action=kouhyou_detail_keni=true&JigyosyoCd=2191300058-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ぎふ福祉サービス利用者センター びーすけっと
所在地	岐阜県各務原市三井北町3丁目7番地 尾関ビル
訪問調査日	令和5年8月21日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

事業所は山に囲まれ緑豊かな場所にあり、敷地も広く畑などもあり散歩は施設周りを車いすの方でも安全に行くことができます。隣の会社の周りは桜の木々が連なっており花見のシーズンは、施設の敷地からもよく観覧でき毎年天気の良い日は何回も花見ができるいい環境の中で生活ができています。健康面に配慮し、天候にもよるが毎日のように喚起をし、朝はラジオ体操とリハビリ体操、昼食前は嚥下体操、夕食前はタオル体操を必ず行っている。長引くコロナ渦であるが、お元気に過ごされている。レク創作活動で楽しむ時間を増やしている。利用者様も職員もコロナワクチン接種を6回終えている。引続き感染対策をしっかり行っていく。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

法人は、医療と福祉サービスにおいて、地域の中で中心的な役割を担う医療法人社団である。職員は、利用者が住み慣れた地域で、その人らしい生活が送れるよう、身体機能の維持・向上を目指して、リハビリに繋がる運動を多く取り入れながら支援を行っている。毎月、家族の訪問があり、利用者の様子を見てもらいながら意見交換や交流をしている。また、担当者が、利用者の健康状態や日常の様子、ケアプラン目標と実施状況を詳細に記述した報告書も家族に渡している。管理者も介護支援専門員資格を有しており、日々、現場に入って利用者の状態を把握しながら、職員と共に、本人・家族の安心に繋がる支援に取り組んでいる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
43 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:15)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	50 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:8,9)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
44 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:14,27)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	51 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度ある 3. たまに 4. ほとんどない
45 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:27)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	52 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:3)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
46 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:25,26)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	53 職員は、生き生きと働いている (参考項目:10,11)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
47 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:36)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	54 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
48 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:20)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	55 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどいない
49 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:18)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	利用者の皆様は同じ町内の方ばかりなので、地域の話など笑顔で話されている。また車いすの方の移乗など利用者様にとって職員のためにも安全で楽な移乗の方法など朝のミーティング等で職員が共有できるように話し合っている。	「笑顔 工夫 感動 心を大切にするケア」を理念に掲げ、目につく場所に掲示している。職員会議やミーティングでケアを振り返り、気付きを意見交換し共有している。職員による工夫が、利用者の笑顔、感動につながる支援を実践している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に入会している。以前は地元の音楽ボランティアや中学生の職業体験など受け入れていた。現在は新型コロナ感染予防のため、自粛中である。	地域との行事やボランティアの訪問は感染症予防のため、すべて中止しているが、利用者は、以前のような地域とのつながりを希望している。11月には、中学生の職場体験学習を受け入れる予定である。	コロナ収束後には、利用者が住み慣れた地域の住民と共に、喜び合い感動できる行事開催や、高齢化社会を地域で支える環境作りの提案について、自治会等との話し合いに期待したい。
3	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	毎年偶数月に運営推進会議を年6回開催している。会議は毎回交代で家族代表が出席される。新たな議題を設け意見交換を行いながら情報を得て、運営にいかしている。	運営推進会議は書面または対面式など、その都度、状況に応じて開催している。行政、地域代表、住民代表が参加し、家族の代表は毎回、交代で参加している。日々の活動計画、食事内容、ヒヤリハットなどを報告し意見交換をしている。家族からは面会や外出希望が多くある。	
4	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	役場の担当者とは毎月運営状況を報告している。運営推進会議にも健康福祉課課長または代理の出席を賜り行政の動向の説明をうかがっている。	行政担当者とは、日頃から報告や相談を行い、助言を得ながら利用者サービスにつなげている。運営推進会議にも毎回参加を得ている。行政主催の行事や会議に参加し、最新の感染予防対策等を運営に活かしながら協力関係を築いている。	
5	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束の弊害は職員全員が理解している。現在も玄関の施錠はせず、外に出ていこうとする方には寄り添って外に出てそのまま散歩をし気分転換を図っている。	身体拘束適正化委員会を定期的に開いている。職員全員が参加し、拘束ゼロに取り組んでいる。現在は、拘束が必要な利用者はいないが、必要な場合を想定し具体的な研修を重ねている。家族にも拘束についてのリスクを説明し理解を得ている	
6	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待防止は職員が共通理解している。入浴介助など毎回職員が交代するので、皮下出血などの異変があれば管理者に報告して確認している。	虐待防止委員会は、身体拘束適正化委員会と同時開催し、不適切ケアについて話し合いながら全職員で共有している。不穏な状態が続く利用者の場合は、原因を明確にしながら対応している。管理者は、利用者中心のケアの実現に向けて、職員のストレスケアにも努め、共に虐待防止の徹底に取り組んでいる。	

岐阜県 グループホームおおぞら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在権利擁護に関する制度を利用している利用者様はおられない。職員の中には以前成年後見人制度の研修を受講している。		
8		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居前や契約時に、当事業所の理念や利用料金、重度化した場合などを書面を用いて十分に説明し理解納得を図っている。介護報酬の改定があれば書面にて説明し同意を得ている。		
9	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族の訪問時や運営推進会議などの時に意見や要望を聞いている。また利用者の状況は毎月近況報告書を書いて報告している。行事の写真やレク活動時の作品も手渡ししている。	現在、面会は中止しているが、家族の訪問時に利用者の状態を説明したり、担当者がケアプラン目標と実施状況を丁寧に記述した「近況報告書」を手渡している。家族が意見や要望を書ける欄も設け、運営に反映できるよう工夫している。	
10	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	運営に関する職員の意見は、毎月の定例会議や毎朝のミーティングでその都度職員の意見を聞いている。それをもとに改善を図っている。	管理者も現場に入っており、日頃から職員の意見や要望を聞いている。管理者と職員は、何でも話し合える風通しの良い関係であり、共に改善に向けて取り組んでいる。	
11	(9)	○就業環境の整備 代表者は、管理者及び職員個々の努力や実績、勤務状況を把握するとともに、職員が向上心を持って働けるよう、ワーク・ライフ・バランスに配慮した職場環境や就業条件の整備に努めている	ほかの施設に比べ離職する職員がほとんどいないことを考えると、職場環境や条件が整っていると思われる。	法人全体の社労士の指導もあり、職場環境や就業条件が整備されている。管理者は、職員の健康面・メンタル面にも気配り、目配りし休憩室なども工夫している。職員個々のワーク・ライフ・バランスにも配慮しながら、モチベーションを高めている。	
12	(10)	○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	管理者は毎朝のミーティングや介護の現場で、介護職員の質の向上を図っている。毎年誰か一人の職員は資格試験にチャレンジしている。	代表、管理者は職員の育成及び介護の質の向上を図るため、資格取得を奨励し、毎年、有資格者の拡大に繋げている。職員同士も互いに認め合い、個々のケアの成功例を記録・伝達しながら、全体の介護力を高められるよう取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会づくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	管理者は同業者とその都度交流している。その時に介護保険制度の改正や介護事業などの意見交換をしている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
14		○本人と共に過ごし支え合う関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者様がホーム内でできる事を見極め、役割を見出してもらい生き生きとした生活になるように支援する。また生活リハビリの観点から、少しでも自立した生活を送れるように図っている。		
III. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
15	(11)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者様の思いや希望などはスタッフ会議や朝のミーティング等で共有している。特に入浴時などは皆さんよく話されそれを職員全員で共有し支援している。	利用者の思いや願い、困りごと等を把握できるよう、個別ケア時やテレビ番組を話の糸口にするなど、雰囲気作りを心がけ、希望に沿った支援を目指し職員間で共有している。把握が困難な場合は時間をかけ、家族の協力も得ている。	
16	(12)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護計画は本人や家族の要望を聞いてそれを反映している。設定期間ごとの見直しはもとより、本人の状況の変化によっても見直しをしている。その計画をもとに月1回介護職員が家族に近況報告を書面で報告している。	介護計画は関係者が意見交換し作成している。ケアマネジャーでもある管理者は、日々、現場に入ること全利用者の状態を詳細に把握している。毎月、家族が訪問する体制も継続されており、日頃の利用者の状態を伝え、話し合っている。	
17	(13)	○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護計画はもとより、排泄回数、食事摂取量、入浴記録、バイタルサインのチェック等毎日記録し毎朝のミーティングで話し合い援助が画一的にならないように対応している。	担当職員を1ヶ月毎に決め、利用者の様子やケアの実践結果、行事や活動で笑顔に繋がった事など、個別記録にも記載し、朝礼などで報告、共有している。見直し時にも活かしている。	
18	(14)	○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	高齢者は医療的なニーズが高いので毎週主治医が来訪している。また歯医者も必要な方には来訪してもらえるように連携している。	利用者は、入居前から法人の病院がかりつけ医でもあり、主治医が毎週訪問している。利用者の状態を診てもらい、本人の状態に合わせたリハビリについても、助言や指導を得ている。	

岐阜県 グループホームおおぞら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域のボランティアさんが歌や踊りなどを披露に来所されていた。音楽療法の先生も月に2回来所いただいていた。しかし新型コロナウイルス感染症対策の為、自粛中である。		
20	(15)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	殆どの利用者様は以前より同法人のかかりつけ医師だったこともあり毎週診療に見える。歯科医師とも連携している。	法人は病院であり、利用者の入居前からのかかりつけ医でもある。毎週、訪問診察があり、職員は、病院の看護師と連携しながら家族とも連絡を取り、安心して適切な医療を受けることができる。	
21	(16)	○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	今まで当法人以外の病院に入院された方は殆どみえない。当法人の病院には毎週利用者様の概況報告を書面で知らせてある。	入居時に入退院の体制等を家族・利用者に説明している。利用者は法人の病院で、治療や入退院時の支援を受けることができる。管理者や事務長が、家族と連絡を取りながら、病院関係者との関係作りに努めている。	
22	(17)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	最期まで慣れたところで、できる限り長く過ごせられよう支援している。重度化し医療依存が避けられなくなったときは、当法人の病院に移ってもらうことを契約時などやその都度書面で家族に説明している。	入居時に、重度化や終末期の対応について説明し同意を得ている。状態の変化時は、関係者が話し合い、重度化した場合は、法人の病院への移行等を支援している。家族に利用者の状態を報告し、その都度書面にて説明と確認を行いながら、支援を行っている。	
23		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時は法人内の看護師が体調を見て医師に連絡がいくシステムになっている。またアクシデントレポートの報告をもとに、急変時の初期対応の仕方を看護師が介護職員にレクチャーしている。		
24	(18)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防災専門会社と契約し、年2回消防訓練をしている。過去には近隣住民や消防団と連携し、参加してもらい消防訓練をしたことがある。	年2回防災訓練を行っている。防災専門会社に委託し、スプリンクラーや火災報知器等の点検を行う等、安全な体制がある。職員の役割分担、近隣との協力関係も整っている。備蓄の点検、補充を定期的に行っている。事業所は災害時における地域の避難場所にもなっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
25	(19)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	長い間入所されている利用者様とは信頼関係も深くなりいい関係が保てているが、反面言葉使いがなれ合いになってきている場面があるので話し合いをし対応している。	職員は、常に利用者の人格の尊重、誇りやプライバシーを損ねない対応に努め、言葉遣いについても職員間で注意し合っている。入浴や排泄支援時には、傾聴・プライバシーの確保等、特に配慮しながら利用者本位の支援に取り組んでいる。	
26		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	自己決定できる利用者様は少数だが、言葉かけなどしたりその方の表情やしぐさで思いをくみ取るように努力している。		
27		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	毎日のスケジュールはおおむね決まっているが、一人一人のペースを大切にしている。特に就寝時間や起床時間はその方に合わせている。		
28	(20)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	おいしく食べられるように温かい料理は温かくして提供している。食事の後片付けは利用者様と職員と一緒にやっている。	献立は法人の管理栄養士が立て、利用者の状態に合った形態で提供し完食に繋げている。イベント食も工夫している。利用者もできる範囲で片付けなどを手伝っている。以前は、敷地内の畑で野菜作りを行っていたが、現在は中止している。	
29		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量が落ちないように、利用者の状況や体調に合わせてその都度調理方法や食事形態を変更している。水分は風呂上りはもちろん暑いときは夜中でもポカリ等を提供している。		
30	(21)	○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアは毎食後行っている。夜間は義歯をはずしポリドントにつけている。	嚥下体操をしたり、食後の口腔ケアの大切さを、定期的に利用者説明している。納得が困難な利用者もあるが、分かりやすく説明することで、スムーズに清潔保持の支援を行うことができている。歯科医師、歯科衛生士の指導を受ける時間も設けている。	

岐阜県 グループホームおおぞら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	一人一人の排泄パターンを把握し、昼間時は全員トイレに行き行って排泄をしている。認知の深く車いす移動の方も目と目を合わせ声掛けするとトイレで排泄ができるようになってきた。		
32		○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	入浴は介護サービスの中でも重要な位置づけとし、毎週2回以上は勿論のこと3回ぐらいは入られるようにしている。順番や入浴日などは特に決めておらず、一人ひとりに沿った支援をしている。		
33		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼間時は殆ど寝ないで全員リビングで過ごされているせいか夜間は皆さんよく寝られる方が多い。訴えがなくても職員が観察し体調の悪そうな方は横になってもらうこともある。		
34	(22)	○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	利用者様全員の薬情報はカルテに綴っており職員はいつでも閲覧出来る。薬の効能や副作用などわからなければ法人内の看護師がその都度調べ口頭で伝えている。	服薬支援時には、職員がゆとりを持って見守り、飲み忘れや飲み間違い、利用者の反応等、複数人での確認を徹底している。また、薬の効能や副作用については、法人の看護師から助言や指導も受けながら服薬管理を行っている。	
35	(23)	○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者様それぞれの力を生かして、掃除や食器拭き洗濯物をたたんでいただいている。レク活動で習字やぬり絵や雑巾の裁縫などもしていただいている。	利用者の残存機能や経験を生かしながら、日常生活の中で作業や活動等、役割を持って出来るよう支援している。職員は「ありがとう、助かったわ」と声かけすることで、利用者の自信に繋げている。	
36	(24)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	施設内の敷地が広いので随時散歩に出かけている。景色など眺めながら、なるべく外気を浴びるようにしている。	日常は、利用者の健康状態と天候を見ながら、広い敷地内を散歩している。また、春には、桜の花見や周辺の景色を楽しみながらの散策がコロナ禍での外出支援になっている。今はまだ、家族との外出は中止している。	コロナ禍で、外出の機会が少なくなり、利用者、家族からも再開の希望が多くある。今後は、Withコロナでの対応を視野に入れつつも、感染拡大状況を考慮し、家族や利用者の気持ちを理解した外出支援に期待したい。

岐阜県 グループホームおおぞら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金は家族が管理している。必要なものはその都度家族に連絡して購入してもらっている。		
38		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話は本人が希望されれば、事務所でできるが殆ど希望された方はみえない。家族からの電話は本人に取り次いで話す機会もある。以前手紙を書きたいと希望された方にはペンや便箋を持ってきてもらったことがある。		
39	(25)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	窓から外を眺めると季節ごとに色合いが変わる山の自然な景色が見える。創作活動で作られた手作りの作品が居室や共用の空間に飾ってある。職員が季節の花を飾っている。	室内は、福祉用具が必要な利用者も、安心・安全に移動ができ、開放的な空間である。窓越しに季節の変化を感じることもできる。利用者は、共用の場所で過ごすことが多く、皆で創作活動を行ったり、出来上がった作品を飾り、心地良い空間づくりを工夫している。	
40		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	皆さんそれぞれソファ等気に入った場所がありいつも同じところに座ってみえる。一人になりたい方は居室におられることもあるが、皆さん概ね昼間時はリビングにみえる。		
41		○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所時に慣れ親しんだものを持ってきていただくように説明はしている。湯呑みや箸や昔の写真等がある。		
42		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	各居室の入り口には名前が貼ってある。トイレのドアはピンクになっておりわかりやすくなっている。廊下は手すりが完備しており安全性のためもあるので物を置かないようにしている。		